

歴史探訪

クラブ

其の
97



History Inquiry Club

文化財課 ☎23局 3635

FAX 22局 3811

明らかにするセメント窯の秘密

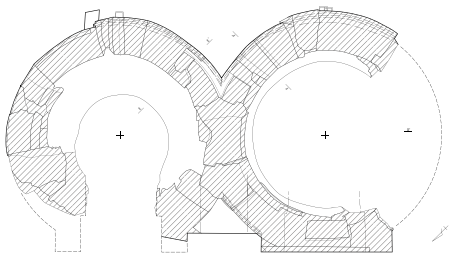
その①

田原市では、御殿山にあるセメントを焼いた窯の調査を開始しました。今回はその概要をお知らせします。

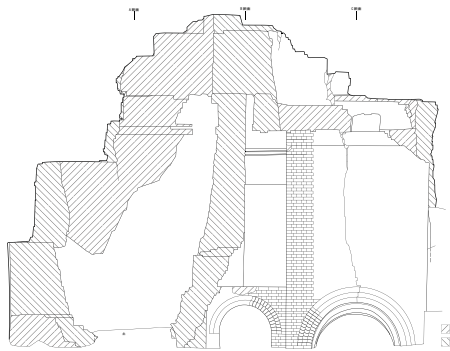
平成20年度は、測量と周囲の地盤状況を調査しましたが、測量結果と現地での観察では、次のことがわかりました。

- ① 同じ規模の窯2基（西側を9号窯、東側を8号窯）が眼鏡のように作られていたこと

② 窯の形は徳利形で、円柱形のセメントを焼く部分（焼成室）に円錐形の煙突があったこと



▲9号窯(右)と8号窯(左)の平面図



▲9号窯(右)と8号窯(左)の正面立面図

③ 内・外面ともに何度も補修されて使われていたこと

④ 8号窯と9号窯の間にあるトンネルが、窯の後ろ側まで突き抜けていること

②については、壊れている部分が大きく、正確な数値がわかりませんが、測量図から焼成室部分は直径約5・8m、高さ7・5mの円柱状であったと推測されます。完全に失われている円錐形の煙突の高さは、古い写真から直径の1・5倍ほどで、煙突の高さは7・5mほどになると推定できます。これらのことから、窯の全体の高さは15m以上あったと考えられます。高い構造物がなかった時代では、ずいぶん目立ったことでしょう。煙突の高さは、焼く温度に

影響がありますので、今後も慎重な研究が必要であるといえます。

9号窯の正面には、下側に幅2mのトンネル状のセメント取り出し口が見えます。この正面だけは直線的な壁で、真つすぐの面を作っています。外側のレンガは、窯の裏面がイギリス積みと呼ばれる細長い面（長手）だけの段と、短い面（小口）を交互に積む方法で積まれています。窯の正面は、オランダ積みと呼ばれる、角の部分に大きさの違うレンガを使用した変則的な積み方をしています。レンガの目地は、どちらもモルタルで積まれている、非常にシンプルな構造です。

徳利形のセメント窯は、全盛期には9基あったのですが、新しい機械の導入などによって昭和11年に7基が取り壊されました。しかしこの2基だけは、セメント産業に携わった方々の努力により今日まで残されています。



▲オランダ積み



▲イギリス積み

文化財課では、セメント、石灰製造産業にかかわる資料、古写真を探しています。皆さんからの情報をお待ちしています。

※セメント窯については、広報たはら平成16年10〜12月号の歴史探訪クラブで、3回にわたって掲載しました。広報たはらのバックナンバーはホームページでもご覧になれます。
HP <http://www.city.tahara.aichi.jp>

(増山)

今月の「表紙」

▼太古の花ともいわれるシデコブシ。市内には、椀、伊川津、黒河、藤七原などの自生地があり、国や県の天然記念物に指定されている群落もあります。今日まで、これらの自生地が残されてきたのは、清らかな水があったからこそ。この豊かな自然を次世代にも残していきたいですね。(O)

【表紙の写真】伊川津のシデコブシ